東日本大震災被災県中学校の取組

宮城県仙台市立高砂中学校

１.本校の概況（震災時および現在の様子）

仙台市立高砂中学校は、東部に仙台港やショッピングモールが隣接し、南部には住宅地や田園地区が広がる地域に位置している。

震災時には、仙台港方面より約 1m30cm の津波が学校に押し寄せ、校舎 1 階が浸水した。また東部の住宅地区は津波により全壊した。学校には約 1,500 名を超える地域の方々が避難し学校は冠水により孤立した。震災翌日から自衛隊をはじめ多くの団体が食料や医療などの支援にかけつけた。震災時の在校生 621 名中、家屋全壊が 51 名、半壊が 72 名、床上浸水が 191 名で全体の約 51%の生徒が津波により被災した。

約 1 ヵ月後の 4 月 16 日には、第 65 回入学式を迎えることができたが、体育館が被災したため、平成 25 年 2 月まで卒業式や授業等を近隣の小学校や市民施設等を借用し、生徒総会を校庭で行うなど不自由な学校生活が続いた。その中でも生徒たちは「元気にあいさつ・元気に校歌・何事にも全力投球」という「高中魂」を合言葉に学習や部活動、学校行事に励み、震災の年に男子バレーボール部が全国大会に出場するなど諸活動において活躍した。

現在は公営復興住宅の建設も進み、仮設・借上げ住宅よりの通学者は 31 名である。現在も長野県や兵庫県をはじめ多くの学校との交流や、全国から様々な方々からの支援をいただいている。平成 27 年 3 月には仙台市で開催された国連防災世界会議において、本校の防災教育の取組について代表生徒が発表した。

その一方で、生徒の心のケアの配慮は現在も必要としており、生徒一人ひとりの心に寄り添いながら、細やかな指導を進めている。

２．学校の写真

３．特色ある取組

1 地域と連携した学校防災活動

　学校周辺地域は津波被災地区であるため、防災に対する意識は高い。その中で地域の方々が必要としているのが「中学生の力」である。地域の防災訓練に中学生がスタッフとして加わり、小さなこどもやお年寄りの手助けや訓練の補助などの活動を行っている。地域の方からは「訓練を通して中学生と顔見知りになり心強くなった」という声が聞かれるようになった。

2 独自の教材を活用

　本校では独自の教材として「高砂中防災ノート」を活用しながら防災学習を進めている。自分の命を守るために必要な知識や判断力などを高めることを目的に作成した。また、震災から約 5 年が経過し、当時の記録や次の世代に語り継ぐ目的で「防災ノート」と併用して「復興のあゆみ」を作成している。自分たちの住む地区だから必要な学習内容をまとめ、年間指導計画のもとに全校一斉防災学習を行っている。また、「防災展示室」を開設し、震災時の状況や復興に向けた取組について紹介するコーナーを常設している。

3 地域貢献活動

　震災からの復興に向けて多くの方々から支援をいただいた感謝をあらわすために、地域貢献活動を行っている。部活動による地域の方々との交流会への参加や、地域の小学生を対象にした技術指導などを行っている。部活動で培った技術や能力を、学校の枠を超え多くの場所で発揮することにより、生徒が自己有用感を高めると共に、地域社会が学校をより深く理解する機会になると考え推進している。

４．取組の写真など

地域防災訓練に中学生がスタッフとして参加

国連防災世界会議教育フォーラムにて発表

新体操部が地域の小学生と共に体操教室を実施

高砂中防災ノート

防災学習の様子